

2022年5月8日（復活節第4主日、C年）牧師メッセージ

「永遠の命」

（ヨハネによる福音書10:22-30）

司祭ヨセフ太田信三

「神殿奉献記念祭」は「ハヌカの祭り」と言われ、現在も毎年12月に守られている、ユダヤ教において大切な祭りです。元々の起源は紀元前6世紀にバビロン捕囚から帰還したユダヤ人が神殿を再建したことにあります。しかし、後に神殿は再び異邦人支配者によって汚され、神殿にはゼウス像や異教の祭壇が築かれました。そこからユダヤ人を救ったのがユダ・マカバイオスです。彼はエルサレムを奪還すると、主なる神に犠牲をささげる祭壇をつくり直し、神殿の汚れを清めました。当時はまだローマ帝国にも支配されておらず、ユダヤ人は一時的に自分たちの王国を作ることも出来ました。それが紀元前164年12月14日。ユダヤ人たちは、このことを記念して神殿奉献記念祭を守るようになりました。

つまり今日の福音の場面は、極めて政治的、民族的な色彩の濃い祭りの最中ということです。人々の民族解放への願いは普段以上に強くなっていたことでしょう。人々がメシアだと噂される主イエスに期待したのは、ユダ・マカバイオスのようなローマの支配から自分たちを解放してくれることでした。「いつまで、

わたしたちに気をもませるのか。」というセリフに、この思いが表れています。

しかし、その人々に主イエスが示したのは、神殿や過去の英雄、そして民族の誇り等に頼って人間の栄枯盛衰に右往左往するのではない「永遠の命」への招きでした。「わたしは彼らに永遠の命を与える。」と言われる主イエスは、一時的な民族解放や自由をもたらすようなメシアではなく、「永遠の命」へと人々を招く真のメシアなのです。

永遠の命とは物理的に永遠に生きるというよりも、永遠である神と共にある命を意味します。主イエスは「わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことができない。」と言われます。すべてのものよりも、わたしたち一人ひとりの命が偉大だと、大事だと言うのです。神と共にある永遠の命とは、一人ひとりの命が神によってどこまでも大切にされ、互いの命を尊び合う生き方に迎えられることです。それは、人間同士で殺し合い、土地を奪い合う生き方とはまったく異なります。「わたしと父とは一つである」と言われる主イエスは、神と御子との愛の交わりに人を招きこむことで、永遠の命をわたしたちに与えてくださいます。そうして、主イエスと父なる神とが力強く守ってくださるからこそ、この世がどのような状況でも、信じるものの命は虚しく終わることは絶対にないのです。